

新潟県における特別支援学校開学に尽くした人々の 精神とその歩み

丸 山 昭 生*・小 杉 敏 勝**・小 西 明***

(平成18年10月2日受付；平成18年11月9日受理)

要 旨

特別支援学校は、障害児に対する教育が必要不可欠であるという先人達の固い信念と熱意に基づいて、盲学校、聾学校、養護学校として誕生した。

本稿では、新潟県内の盲・聾・養護学校4校の誕生に際し、どのような経緯があったのか、どのような多くの人々の苦労があったのかを明らかにした。そして、開学以来、今日まで営まれてきた各学校の教育基盤と、それを支えてきた精神は何であったかを明らかにした。

結果、新潟県の特別支援学校の開学のきっかけは、障害のある子どもたちの近くに存在していた人々の思想や行動が大きいことが分かった。とりわけ、親や祖父母を始めとする家族、教師、医師、地域の人々等の身を削るような努力があった。その思想や努力は、何らかの形で受け継がれ語り継がれなければならないと考えた。

KEY WORDS

特別支援学校 Special support schools

開学の精神 The mind for establishing the schools

開学に尽くした人 People made efforts of establishing the schools

1 は じ め に

障害児の教育は今、特別支援教育へと大きく転換が図られている。この教育の理念は、障害児を特別な場で行う従来の「特殊教育」から、一人一人のニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行う「特別支援教育」に転換するということである。この転換の中で、従来の障害に加え、軽度発達障害（LD、ADHD、高機能自閉症等）も対象にすることや、盲・聾・養護学校制度の見直し等が提言されている。

特別支援教育は、平成19年度4月1日から実施されるが、本稿では、障害種別を超えた学校制度（特別支援学校）への転換に際し、改めて盲・聾・養護学校の開学に目を向けたいと考えた。それは、種別の薄れた特別支援学校への転換が図られるとしても、固い信念と苦しい思いで開学に漕ぎ着けた先人たちの努力を、この機会にもう一度振り返ることが有意義であると考えたからである。

* 障害児教育実践センター

** 元新潟県立高田養護学校

*** 新潟県立新潟盲学校

本稿では、平成 18 年 3 月に 118 年の歴史に幕を閉じた新潟県立高田盲学校をはじめ、新潟県立長岡聾学校、新潟県立高田養護学校、新潟県立柏崎養護学校の 4 校を取り上げ、これらの学校の開学に尽くした人々の精神とその歩みを明らかにしたい。

2 新潟県立高田盲学校

2.1 日本の盲教育の黎明

世界で最初に組織的な盲教育を行うための盲学校は、1784 年パリに設立された。日本では、江戸末期に西洋から輸入された地理書や医書に、盲教育を含む特殊教育事情の一端が見られる。また、明治政府が欧米に派遣した外交使節や留学生によって、直接見聞した特殊教育の実情が紹介されるようになった。

パリの盲学校に遅れること百年弱、日本では明治 11 年（1878）5 月 24 日京都盲啞院が設立された。翌明治 12 年（1879）11 月 5 日大阪模範盲啞学校が、続いて同年 12 月に楽善会東京訓盲院が設立された。その後各地に、盲学校や盲啞学校の設立が企てられたが、実現困難なものや短命のものが多く、大阪模範盲啞学校のようにわずか 8 ヶ月で消滅するものもあった。

2.2 米山検校の鍼道指南之学校

ヨーロッパから一世紀遅れて日本の組織的な盲教育は芽生えたが、日本にそれまで盲教育に心を寄せるものが全くなかったかというところではない。

越後は三島郡出身で、江戸へ出て大成し巨財をなした米山検校がいる。彼の盲教育への業績はあまり知られていないが、宝暦四年（1754）2 月、パリの盲学校より 30 年前に盲人学校設立の願文を提出し、短期間ではあるが実際に学校運営を行った記録がある。

検校は、元禄十四年（1701）三島郡長鳥村平沢（現柏崎市東長鳥）で生まれた。少年期に事故で失明し、その後 12 歳ころに江戸へ上り、嶋浦益一惣検校の弟子となり、杉山流鍼術を究め大成した。また、優れた経済人でもあり巨万の富を蓄えた。生国の長鳥村をはじめとする越後国の飢饉には、救援米を送り人々を救った。

検校 53 歳（1754）の時、越後国各領主の江戸屋敷へ「鍼道指南之学校設立」について、下記のような要旨の願文を提出している。

- ・自分の出生地は長鳥村である。
- ・嶋浦惣検校の一門で鍼術を学んだ。
- ・幕府御歴々様の治療をし、出世した。
- ・盲人のために自費で鍼道指南之学校をつくり、去年の冬から教え始めた。
- ・芸のない盲人が悲惨な状態にある。だから自分が鍼道指南之学校で鍼道を教える。
- ・まずは生国越後の盲人から招く。授業料、食事代は自分が出す。
- ・20 歳から 40 歳の盲人を対象とする。
- ・5 年間かかる。それは経路をあらまし覚えさせるためである。

願文の内容は 250 年前とは信じがたいほど見識が高く、教育内容も現在の教育制度に近く、

彼の鍼道学校に寄せる意気込みが伝わってくる。

この学校は足掛け2年ほど開設されたが、残念ながら頓挫する。それは、高田藩の松岡りょく一検校が、自分の仕事が減るからという理由で、京都の職検校に訴えたからである。厳しい封建社会において、志高く盲教育に取り組んだ検校の夢は、はかなく水泡と帰した。この夢は、百年後の大森隆碩らの活動にまで待たなければならなかった。

2.3 越後の盲教育

2.3.1 天皇の御下賜金千円

明治新政府下における一般盲人の生活は、大きく混乱した。明治4年(1871)11月、それまで盲人の職業を保障していた当道座制度が廃止されたことや、生業としていた三療(あんま・はり・きゅう)が西洋医学に圧迫されてきたことなどによる。

このような状況下、越後はとりわけ視覚障害者が多かったといわれている。明治10年(1877)8月、明治天皇が北陸巡幸で越後路に入られた折、沿道の奉迎者の中に眼病者が多いことに気遣い、眼病の治療と予防のためにと御下賜金1,000円を賜れた。時の県知事永山県令は、直ちに眼科講習所の開設などの対策を講じた。また、県内各所の医師を招集し、眼科の治療法などを学ばせた。これが世に知られた「天皇の御下賜金千円」である。

2.3.2 大森隆碩らによる盲人矯風研技会

こうした中、途中で消滅せずに学校経営がなされた盲学校で、日本で3番目に設立されたのが、雪国の高田盲学校の前身である「盲人矯風研技会」である。

高田の相生町(現別院通り)の眼科医大森隆碩は、明治19年(1886)に目を患い失明の危機に陥った。このことが動機になり、盲人教育の重要性を痛感して同士に呼び掛けたところ、同じ眼科医の杉本直形、小池玄有らの有志が集まり「訓盲談話会」が組織された。地方の雪国では初めて私塾的な盲人教育が創始され、特殊教育の始まりを告げたと伝えられている。

翌、明治20年(1887)11月30日には会名を「盲人矯風研技会」と改め、高田の光樹寺で広く盲人を募集し、鍼按、琴などの組織的な教育が始められた。これをもって高田盲学校の創立とし、この日を創立記念日としている。この会の設置趣意書の一文には、「盲人の生業についての研究を進め、社会の進歩に遅れぬようにした」とあり、盲人が教育の機会をあたえられないまま放置されていることに対する深い同情がみられる。

パリ盲学校に遅れること約100年後の高田盲学校設立であるが、その後、激動の明治・大正・昭和の時代を乗り越え、校名を変更しながら118年の歴史を綴ることとなる。

2.4 盲学校の苦難の歩み

2.4.1 私立訓矇学校へ

明治22年(1889)10月、大森隆碩や杉本直形らの代表は、「私立訓矇学校設立願」を作成し、学校設立認可を県に請願した。上述の「盲人矯風研技会」から、明治24年(1891)7月新潟県知事の正式認可を得て「私立訓矇学校」と改めるまで、4回の申請と2年の歳月を要した。認可に至るまでの申請却下理由は、学校組織の不完全、施設設備・教材教具の不備、運営費の不足などがあげられたが、執念でこれを克服している。「盲人矯風研技会」は、開設当初は正式な認可学校ではなかったが、当時の日本では先進的な視覚障害児教育機関であった。

高田盲学校の創立者大森隆碩は、眼科医として教育者として、明治維新前後の激動の時代を

情熱的に生き抜いた、郷土上越の偉人である。混乱した社会の中で意欲的に知識を吸収し、ヘボン博士と上海に渡ったり、高田で教育や医療などの社会事業に参画したりするなど、生涯における活動は幅広い。

2.4.2 心事未ダ必ズシモ盲セズ

高田盲学校には、大森隆碩による「私立訓矇学校設立願」の草稿が保存されている。ここには、後世に語り継ぎたい含蓄の深い一節がある。

「……嗚呼視官其ノ効ヲ奏スル能ワザルモ、心事未ダ必ズシモ盲セズ」である。一部を意識すれば、「盲人を教育して、人間の道を教えてくれるところがない。盲人は教育を受けていないため、生まれつきもっている良い性質、才能を発揮できない。明治になって、文明開化して勉強すれば誰でも偉くなれるのに、一人盲人だけは昔のままで教育を受ける機会もなく、社会の進歩に遅れやっかいものになってしまう。いったい誰がこのようにしたのか。視覚は機能しなくなったけれども、心の中まで見えなくなり、なにも分からない状態になっているのではないのだ。」ということになる。

更に、「盲は肉体の盲だが、矇は心の盲であり、まず心の矇を敬いて後に教育するべきと考え、校名を訓矇とした」としている。訓矇学校は、当時の多くの盲啞学校が手に職を与える職業教育にとどまっていたが、それに飽きたらず、心を養い一般教養を培うことの大切さを強調している。

盲人も教育すれば、必ず人間として生きられると説いている。ここに大森隆碩の考える盲人教育の神髄がある。

2.4.3 財政難の中での盲教育の推進

日本での初期の盲学校は盲啞学校として誕生しており、盲人と聾啞者を同じ施設で教育していた。大森隆碩は、心理的に、また、人格形成の上で両者は同一でないとし、聾啞者関係からの入学の申し出を断っている。大正から昭和初期にかけて多くの盲啞学校が、盲教育と聾啞教育分離を成し得たことを考えると、先見性のある選択ともいえる。この建学の精神は揺るぎなく、後に県内に創設されたのは全て盲啞学校であった中で、生徒数が少なかったにもかかわらずこの姿勢は貫かれている。

「盲人矯風研技会」設置と同時に大森隆碩は、盲人が社会の進歩に遅れぬよう、盲人の伝統的生業である鍼按技芸以外の職業分野の研究を重ねた。また、指導法についても熱心に取り組んだ。

明治25年(1892)3月には、先進校視察のため滝見直樹を東京盲啞学校(現筑波大附属盲学校)に派遣するよう計画したが、資金不足で断念した記録がある。翌年に念願かない、全盲の丸山勤静を上京させ、東京盲啞学校において各教科の指導法、点字の書き方の指導法を受けさせた。彼は、点字器一面を購入して帰校するが、以後、凸字による指導を徐々に廃し、点字指導に傾注することとなる。地方では最も早い点字指導となった。

初代校長大森隆碩の学校経営上の課題は、常時の資金不足であった。運営資金は寄付によって支えられていたため、財政状況は不安定で、不意の出費ですぐに逼迫したとある。彼は診療による収入のほとんどを学校維持のために費やした。学校の炭が無いといえ、「おスミ、一枚脱げ」と言っては妻の着物を質入れさせ、学校にお金を届けさせたとの回顧談がある。

2.5 小西信八と高田盲学校

2.5.1 小西信八の略歴

日本の盲聾教育の育ての親として有名な小西信八は、長岡出身で、越後が誇る郷土の偉人である。彼は、その生涯において高田の地や高田盲学校と深い関わりがあった。

日本点字の始まりは、視覚障害者のためにそれまで使用した線文字を捨て、点字を採用した小西信八の功績によるものである。

小西信八は、嘉永七年（1854）1月24日、長岡城下西神田（現長岡市西神田町）長岡藩医小西善碩の二男として生まれた。兄は早世した。明治元年（1868）の戊申戦争では、長岡から栃尾に逃れた。この戊辰戦争での官軍負傷兵を手当したのが、高田盲学校創設者の大森隆碩や杉本直形らであった。

明治3年（1870）16歳の時、田中春回の私塾に入り漢学と洋学を学んだ。その後、小林虎三郎の「米百俵」で名を残す長岡洋学校（県立長岡高等学校の前身）が明治5年（1872）に設立されると、旧士族の中より16人の貸費生の一人として、第1回入学を果たした。しかし、当時の旧士族は、禄の没収により家計は困窮を究めており、その後は苦学を強いられることとなる。

2.5.2 苦学の末に日本点字考案

小西信八は、明治9年（1876）9月に東京師範学校中学師範科に入学した。苦学して、明治12年（1879）5月中学師範科を卒業し、千葉中学校教師を振り出しに、千葉女子師範学校教師長兼監事を経て、翌年には東京女子師範学校（後のお茶の水女子大の前身）に転任し、幼児教育に6年間従事した。この師範学校時代、附属幼稚園の松野クララにより、ペスタロッヂやフレーベルの影響を受けたのではないかと考えられる。この経験が、明治19年（1886）1月、文部四等属訓盲啞院掛専任の辞令を受けるきっかけになったのではないかと。かくして、小西信八は33歳にして我が国盲啞教育草創の業についたのである。

当時の東京盲啞学校では、片かな、平かな及び漢字を、ときには変体かなをも教えていた。かねてから文字改良を志し、かな文字論者であった小西信八は、同校教諭であった石川倉治に日本点字考案を勧めた。石川はこの期待に見事に答え、明治23年（1890）11月に日本訓盲点字を完成させた。

2.5.3 訓盲点字と高田盲学校

石川倉治の翻案した訓盲点字は、何らの抵抗もなく徐々に盲人の文字として普及していった。

明治26年（1893）10月、新潟県の私立高田訓蒙学校が東京盲啞学校から点字器を購入し、これまでの凸字をやめたのをはじめ、その後に開設された各盲学校が、いずれも点字を採用したことはいうまでもない。とあるが、すでに4ヶ月前、高田訓蒙学校鍼按科教員の丸山勤静が上京し、東京盲啞学校において各教科の指導法や点字の書き方の指導を受け、点字器一面を購求して帰校し、以後凸字による指導を徐々に廃し、点字指導に意を注ぐことになり、点字指導の発端となっている。

丸山勤静は全盲であり、東京盲啞学校において自分自身が点字を体験し、それを高田に持ち帰り生徒に伝授したとある。こうした丸山の努力によって、地方の盲学校では初めて点字指導が行われたと考えられる。丸山と、彼を支えた高田訓蒙学校職員の情熱と意気が伝わってくる逸話である。

続いて、明治28年（1895）6月、名誉教師松本常が二度目の東京盲啞学校を視察し、小西

信八校長の指導を実際に受け、点字教科書数冊を持ち帰っている。明治31年(1898)1月15日、大森隆碩校長は、東京盲啞学校、横浜訓盲院を視察し、高田訓矇学校での教科書の全面点字化を決定している。

2.5.4 たふれてもまた おきあがる

小西信八は、出生地長岡の私立長岡盲啞学校（現県立長岡聾学校の前身）創設にも尽力している。現長岡聾学校の校長室には、以下に示す小西直筆の色紙が掲げられ、子どもたちや職員を励ましているが、彼の盲聾教育に賭ける神髄の一端も知ることができる。

この達磨こそわがかかみなれ

たふれても たふれてもまた

おきあがる

こにしのぶはち

東京盲啞学校長となった小西信八は、明治37年(1904)9月16日に、啞生1名を伴い私立高田訓矇学校を視察し、懇談会に出席している。私立長岡盲啞学校創設の前年であった。

2.6 盲人教育の神髄

盲教育史の表舞台には登場しないが、越後新潟での盲人に対する教育の試みは江戸時代からあった。米山検校は、失明によって学んだ鍼術による大成とその経済力を背景に、悲惨な状態にある盲人を救おうと、鍼道指南之学校を設立して盲教育を始めた。しかし、同業の横やりで夢は水疱と帰した。

大森隆碩は、自らの失明危機の体験から、盲人教育の重要性を痛感し、「心事未ダ必ズシモ盲セズ」の考えで、財政難の中、盲教育に生涯を捧げた。盲教育の推進には、越後出身である小西信八ら、中央の知識人の考えを積極的に取り入れ、力も借りた。小西の「たふれてもまたおきあがる」達磨の精神は、生徒のみならず教育関係者にも浸透したに違いない。

その後、高田盲学校の継承は、小島彦造を始めとする多くの偉人たちに支えられることになるが、児童生徒数の減少で、平成18年(2006)3月31日、ついに118年の歴史に幕を閉じるようになった。

高田盲学校は閉校にはなったが、盲教育の創設期に活躍した先達たちの神髄を、しっかりと記録にとどめ、継承していかなければならない。

3 新潟県立長岡聾学校

3.1 親・金子徳十郎

長岡聾学校の発足は、聴覚障害の子どもたちの幸せを願う親の努力と、日本の聾啞教育の開拓者であり育成者であった教師たちがその礎となった。

長岡町山本町で薪炭業を営むかたわら、長岡町会議員として活躍していた金子徳十郎は、3歳で中耳炎を患い聾啞となった長男の将来を考えていた。明治37年(1904)3月、思案の末に東京盲啞学校に入学させることを決意した。

長男の誕生から、東京盲啞学校入学までの経緯、親としての苦悩と希望を綴った記録を、長

岡聾学校百年誌から紐解いてみた。

「長男進太郎は生まれると間もなく非常に熱烈な耳疾に罹ったのが原因らしく、嬰兒時代には呆然としていたが其後聾人になったと言う事が判った。そこで段々成長してみると聴く事と話す事はできぬが他には別段故障もないから、何か覚えさせ得るものならばと思ふて就学年齢に達するや表町校に進学せしめた。」

「処が目と手の働きで出来る学科例えば習字、図画の如きは兎に角形も一通り出来、又追々其の進境も見えて曾て其の習字は古志郡教育品展覧会に出陳されたこともある。然し作文とか算術とか云う者は到底不可ない。そこで、前途をどうしたら宜かろう、如何なる職業を授けたものと云う事について私も大いに苦心した。」

そして金子徳十郎は、家族とともに我が子の職業について真剣に相談をすることとなる。経師屋、理髪師、塗物師、仕立屋等々、苦心して我が子に適する様々な職業を考えたのである。

「太物商を営んでいる徳十郎の妹が『仕立屋ならば宅にてできる仕事であり、宅の手助けにもなる』としきりに勧める。研究してみると手先でできる仕事であって、実用的のものであるからそれが良かろう」という評議が家内で一決するのである。

長男を仕立屋に育ててほしいことを、友人大川氏に依頼に行った折り、大川氏は、「それも悪い考えでもあるまいが、しかし、とにかく東京盲聾学校という立派な学校も出来て居るのだから同校へ入学させるのがよい」と切に勧められる。～（中略）～

友人大川氏は更に、「多田俊造氏の子息眞佐雄（後長岡盲聾学校教諭）と云う人が聾者であるが、東京盲聾学校へ入学していて、今、暑中休暇で帰省している、先づ試みにその人に頼んで少しく教育の手解きをしてもらったらどうか。幸いに私は先方の御両親をよく知って居るから私が行って頼んでやろう」とまで熱心に言われる。～（中略）～

息子を連れて徳十郎は多田眞佐雄氏に面会する。

眞佐雄氏は、自分が東京盲聾学校において受けた授業の経験からして実物教育の一端を示された。爾来14～5日を経過すると息子は非常に愉快を感じずよう、自ら煙管、茶碗その他手元の器具をもってその品名を文字で表現して示して、すこぶる愉快に堪えないようである。

本人が愉快であるばかりでなく一家とも初めて多田氏に依って教育の功著しいことに驚嘆し、母は初めは熱心なる職人説であったものが、これならば2年位東京へやってはどうかと自分から言うようになってきた。多田氏も『見込みがあるから学校に入れたらどうか。』と勧める。～（中略）～ますます東京盲聾学校へ入学させるべき決心を定めた。」

（長岡聾学校百年史P 6 資料編P 14 現代語訳）

3.2 東京盲聾学校長 小西信八

長岡出身で、東京師範学校を卒業し、千葉、東京で教師をしていた小西信八は、わが国初の盲聾教育に携わり、盲聾教育の理論的・実践的指導者として東京盲聾学校長となっていた。

明治37年（1904）3月、我が子を東京盲聾学校に入学させるために上京してきた同郷の金子徳十郎と面識した小西は、金子に「新潟県人で本校在学生の数は、東京、埼玉に次いで3番目に多い。新潟県の中核の地・長岡に盲聾学校が必要なのだ。」と、長岡に聾聾学校を設置するよう説いたのである。

その時のことを金子徳十郎は次のように記している。

「倅の入学のことを一通り小西先生にご依頼が終わると、先生はその他に話したいことがあるから自宅に来てくれと云う。(中略) 君は自分の子供一人だけ教育を授けるよりも、寧ろ大勢の不幸なる盲啞者に教育を授けるため、大奮発をして長岡に盲啞学校を設立してはどうだと言われる。私は元来一介の商人にして到底その器ではない旨を答えたが、小西先生は、否、君が一番適任だと思う。実は、盲啞教育普及のため、従来数次長岡の知人諸君に何度も盲啞学校設置のことを説いてみた。顔を合わせるほどの人には凡て長岡に盲啞学校設置のことを説いたが、一人の不同意を唱える者なく皆賛成を表している。が、遺憾ながらその後少しも実現されない。これは自分の未だ熱心が足りないためか、あるいは説明が悪いためかといろいろ考えている。

併し、西洋における盲啞学校の沿革等を調べてみると、その設立の動機は盲啞者をその子弟に有する人々が、痛切に教育の必要を感じて献身的に努力するのに原因するのが多い。

君は多年公共事業にも熱心な人であるということだが、その上子息に啞者をもっているのだから君がこの事業に尽力するには最も適任者である。

殊に新潟県人の目下本校の在學生は15名にて、そのうち長岡及び附近から5名も来ている。態々新潟県から東京まで出して教育を受けさせるのが既に15名もある位だから、県下における有識の階級には相当に盲啞教育の必要なる思想が普及しているに相違ない。

それなのに未だ盲啞学校の設立を見ないのは主唱者に適任者がいない結果だと思うと極めて熱心に説明された。実に自然に涙が零れるようである。」

「先生の熱誠に感動して茲に初めて長岡盲啞学校設置の心を決した。」のである。

(長岡聾学校百年史P 6 資料編P 15 現代語訳)

3.3 長岡盲啞学校設立への動き

3.3.1 町当局との折衝

小西信八の熱意に意を決した金子徳十郎は、帰郷すると早速「長岡聾盲啞学校設立」のための準備に取り掛かる。

盲啞学校設立の意志を固めた金子は、早速町長を訪ねて「小西校長からの熱い依頼と自身の意志」を伝え協力を依頼する。

時の町長秋庭半は、盲啞教育の必要性について賛意を示すとともに、開校に際して校舎は町内小学校校舎の一部を貸すことができると理解を示す。同時に町長は金子に「経費と生徒数」について熱く語るのであった。

学校開設にどのくらい経費が必要なのか、開校するにしても長岡近辺に実際に入学する生徒がどのくらいいるのか、の二点を心配して、学校開設の具体的な計画作成とそのもとになる調査の実施を示唆した。

3.3.2 盲啞者の実態調査と学校設置計画の作成

町長の意見に納得した金子は早速調査に取り掛かった。

役場の戸籍簿、警察署の戸口調査等によって実態を把握しようとしたが、「盲啞者」としての記載がないこと等の理由で数はつかめなかった。

町内の五つの小学校長に依頼して、各学校所在地に居住する盲啞者の氏名・年齢を報告して貰うことによってようやくその数を把握することができた。

結果は、8歳以上17歳以下の啞者14人 盲者15人であった。

実態調査とともに、一方で盲啞学校設置計画も作成していった。記録によると、概略以下の
ような計画であった。

- 明治 37 年（1904）7 月、夏期休暇で帰省していた長岡出身で東京盲啞学校に学んでいる多

田眞佐雄、横浜訓盲院出身の勝俣傳一を招聘して、盲啞者の保護者に対して「盲啞者が受けた教育の実績」を示していかに教育の効果があるかを理解してもらうことに努めたのである。会に参加した小学校長の中には、盲啞学校が必要なことを認識し、その設立を援助するよう町民に呼びかける人も見られた。

教育を行う場として、表町小学校校舎の一部を借り受ける予定だったが、「盲啞学校ノ所在ヲ一般社会ニ普ク認知セシメル要ヲ認め、表町小学校ニ比シ坂之上小学校ノ方が遙カニ人目ニ触ルル好置ニ存ル・・・」という理由で坂之上小学校の一部を借用した。

○順調な資金募集

資金調達に取り組んだ金子に、旧知の人達が理解を示してくれる。

ある人は直ちに賛意を表明し寄付金を記帳してくれる。ある人は、息子とともに金子が計画していた募金以上の金額を記帳してくれた。

そのようにして金子の信念に基づいた計画に賛同した地域の人たちの善意と協力により、募金を実施した2ヶ月間に2,000円の記帳を得ることができ、向こう5カ年の経常予算額が記帳され、前述の校舎借用の決定理由と共に、実際に5,813円98銭もの尊い浄財が集まったのである。

「地域の人たちが地域に在住する障害のある人たちの教育・生活を推進する」という現代の課題を、明治38年(1905)、今から百年前の人たちが行っていたことの事実には驚嘆する。

○理解啓発

学校設立に係る資金の用途が立った金子は、更にすすんで県下多くの人たちに対して「盲啞教育の切実な必要性」を徹底して訴えたいと考えた。

そして金子自身に「長岡に盲啞学校設立を！」と強く懇願した小西信八に直接話をして貰うことが肝要であると、長岡への来訪を依頼することとなる。

幸いなことに、時を同じくして小西は、高田訓蒙学校の視察のため帰郷することとなった。

小西信八は、この機会を逃さず盲啞者の保護者、当時の代議士、学校設立の尽力者に対するとともに、当時の中学校、女子師範学校、高等女学校の生徒に対して講演し、盲啞教育の必要性について渾身の思いを訴えた。

この訴えが参集した人たちの感動を呼び、学校設立への協力の気持ちを及び起こし、長岡盲啞学校創立の大きな力となったのである。

3.4 熱誠を込めて設立した私立長岡盲啞学校

聴覚障害に限らず、障害に対する偏見はいつの世にも存在する。それらの偏見や差別を克服し、我が子への教育の必要性と可能性を認識して行動した金子徳十郎。そして、郷土長岡の出身で東京盲啞学校長の要職を務め、欧米の聾教育事情を視察して日本の聾教育推進役となった小西信八。二人の信念と熱誠が織りなし、短期間の内に今日の長岡聾学校の前身である私立長岡盲啞学校を開設した。時は、明治38年(1905)月10日のことであった。

金子徳十郎らが示した聾啞教育への取組の精神は、今日でも脈々と受け止めていかなければならない。

4 新潟県立高田養護学校

4.1 「捨身の願い」を实らせた祖母，徳山ミサヲ

平成 19 年（2007）度に創立 40 周年を迎える高田養護学校の誕生に，故徳山ミサヲの存在があったことを忘れてはならない。

徳山は，上越地区一円の婦人会組織を動かして，脳性まひの孫をはじめとする障害のある子どもたちのための教育機関設置運動を始めた。一切の責任を自分にと，正に「捨身の願い」で取り組んだ。高田養護学校開設の 5 年前，昭和 38 年（1963）のことである。

私たちの身边には，いかに不幸の多いことか。ものが言えぬ，見えぬ，聞こえぬ，足がきかぬ，知能が足りぬ等々の子らは，友達が喜々として学校に行くのに，行くところのない不幸を嘆いている。

「はく，ゆく所がないんだ。」と脳性まひの私の孫も何年叫び続けたことか。この子らにも光を，悦びをと，幾年も願いつづけてきたのであった。

上越には 511 名（昭和 31 年現在）これらの子がいた。

私は，31 年から上越婦人協議会長をしていたので，この上越一丸の組織の力で，かかる不幸な子達の療育機関を作って谷間の子にも灯を掲げることを決意した。

上越心身障害児療育機関設置期成同盟を作り，一大運動の展開を始めた。もちろん，会長の私は，一切の非難も苦勞も一身に受けて悔いぬ覚悟を決めた。

（1972 高田養護学校創立五周年記念誌から 「捨身のねがい」）

4.2 米一升運動で資金調達

上越地区婦人会には当時 4 万人の会員がいた。

会員一人が 125 円を拠出すれば，500 万円になる。

徳山は，教育機関設置に婦人会だけで 500 万円の資金を募ることを決意する。

昭和 38 年当時，米 1 升の値段が 125 円であった。現金を寄附する代わりに米 1 升を拠出して協力した人も大勢いた。

後々まで語り継がれる『米 1 升運動』である

集まった浄財 500 万円の喜捨内容は以下のとおりである。

中頸城郡連合婦人会	1,565,000 円	糸魚川西頸城連合婦人会	894,000 円
高田市連合婦人会	685,000 円	直江津連合婦人会	585,000 円
新井市連合婦人会	555,000 円	上越女教員会	138,000 円
東頸城郡連合婦人会	555,000 円	預金利子	約 23,000 円
			計 5,000,000 円

徳山は，他の婦人会委員とともに，集まった 4 万 5 千の署名簿をダンボールに納め，500 万円の貯金通帳を新潟県知事公舎に運び，切なる願いを訴えたのである。

4.3 高田養護学校建学への胎動

当時のことを偲び、徳山は歌を詠んでいる。

それは、わが孫をはじめとする障害のある子どもたちのために教育機関設置を決意した当時から、学校が誕生した時までの6年間の心境が切実に伝わってきて、詠むものの心を打つ。

= 一粒の麦 養護学校誘致のころを偲びて =

- * 一粒の麦たらんとて或る一夜 捨身の願い固めけるかも
- * 暁にちかしと知れば今日の日の 命の血汐たぎりそむかな
- * 摺り合えば母の毛綱は強かりき この子呂の家かくも建ちけり
- * この子呂に光はあれと母我等 叫び続けて六つ年の日々
- * 幸せうすき我が子委ねてたらちねは 笑まひ静かに悦び交す

高田養護学校建設用地購入のために集められた500万円の浄財は、後述するように不要となり、子どもたちのためのカラーテレビ、校務用乗用車、ピアノ、通学道路用土地買収費用、学校園造園費用に充てられたのである。

その後、初代PTA会長になった徳山らの好意を「永久に伝え残さねばならない」と考えた当時の職員は、「米1升運動」にちなみ、「お米をこの運動に捧げる」母の姿を像にして残すことにした。

その像は『結願の像』と呼ばれ、現在も寄宿舍ポプラ寮の玄関脇にたたずんで、子どもたちを静かに見守っている。

4.4 おまん先生（初代校長・中村憲三）の存在

4.4.1 おまん先生

高田養護学校開校が開設されるまでに、教育界にも情熱をもって障害のある子どもたちの教育に取り組んでいた人がいる。

後に初代校長になり、「ここに日本一の養護学校をつくろう」と、高田養護学校の教育に打ち込んだ中村憲三である。

「あなた」のことを高田の方言で「おまん」と言う。「あなた、げんきですか？」を「おまん、げんきかね？」と親しみを込めて言う。中村校長は、いつでも、どこでも気さくに「おまん！」と職員に話しかける教師だった。爾来、高田養護学校に関係した人たちは、中村校長のことを「おまん先生」と呼ぶようになった。

中村は、県教育庁特殊教育担当指導主事として仕事をする中で、「自分の孫をはじめとする上越地区の障害のある子どもたちが、適切な教育を受ける教育機関がほしい」と切なる願いをもって東奔西走する徳山ミサヲに出会い、養護学校開設の意志を固める。

4.4.2 徳山ミサヲとの出会い

後年、徳山は中村との出会いを次のように述懐している。

・・・（療育機関設置のために）手続き上の法規に基づく慣例を知らぬ戸惑いも多かったが、かつて上越婦人会館を建てた経験をもとに動いていった。

ところが、神仏は私たちを見捨てなかった。まことにより指導助言者に出会ったのである。五里霧中の中、私は訴えるところを求めて出県し、ふと疲れた心身を新潟ホテルのロビーに運んだ時に、まったく偶然に中

村憲三先生との出会いに恵まれたのであった。

わらにもすがりたい心情を聞き取って、先生は明るい今後の方向の示唆を与えてくださった。

『補助金がおりに時間がかかる厚生省関係の施設をのぞむより、文部省関係の養護学校をねらったかどうか。期する高嶺はひとつ故、早い方から着手しよう。幸い、県には精薄（原文のまま）養護学校設立の動きもあるからと、県の事情に詳しい先生は、早期実現の具体的運動方策を示してくださったのである。（1972「高田養護学校創立五周年記念誌」から）

4.4.3 精魂傾けた開校準備

昭和43年（1968）1月1日、新潟県教育委員会は、初代校長に中村憲三、教頭に糸魚川中学校で特殊学級を担当していた中村秀雄、事務長に行政経験豊かな横尾篤を発令した。

中村憲三は、当時の心境を次のように述べている。

昭和43年1月1日は、本校新設の門出であった。しかもこの日は、明治百年の元旦にあたる吉日でもある。

開校準備を命じられた私と、教頭、事務長の3人は、1月10日、新雪の降りしきる仮校舎（旧金谷中学校）の玄関に立った。ガラスがわれて、吹雪の吹き抜ける森閑とした古い校舎が、雪の中にすっぽりとうまっている。この土地に、関係者待望の学園を建設する日がついにきたのだと思うと、身震いするほどの使命感があふれた。

人の気配を感じて振り向くと、黄色い鉄兜（原文のまま）にアノラック姿の青年もじっと雪原を見詰めていた。「校長先生ですね。私は高田養護学校建設の現場技師をおおせつかった長沢です。若輩者ですが、どうぞよろしく願いいたします。お互いたいへんな仕事ですが、しあわせのうすい子どもたちのために、がんばりましょう。」とあいさつした。思いがけず、ここにもまた、新しい学校づくりに若い情熱を傾ける仲間がいて、さらに勇気づけられた。

この青年のその後の陣頭指揮ぶりは、実に見事であった。万感を秘めて堅い握手をして別れたときの光景は、今も脳裏に焼き付いていて、おそらく生涯忘れることがないだろう。

（1974 高田養護学校「教育課程編成のあゆみ」巻頭言）

4.4.4 日本一の養護学校をつくろう

高田養護学校の教育計画を開くと、冒頭に「教育の基調」が示されていて、「ここに日本一の養護学校をつくろう」と決意した初代校長中村憲三の思想が受け継がれている。

中村は、次のように職員に訴えていた。

- * 「日本一の養護学校」をつくるには、「格調の高い和」が必要である。
- * 「格調の高い和」をつくるには、職員全員のところがまとまらなければならない。
- * 「格調の高い和」は、ただ単に迎合することとは違う。

そして、「格調の高い和」について、次のように述べている。

「格調の高い和」この合い言葉は、本校職員の伝統になりつつある。単なる懇親的なものでなく、各自がそれぞれ自己の本分を尽くすとともに、友への理解協力によって生まれるものと思う。しかもそこに品格と教養をも含めたいものである。

「日本一の養護学校」それは比較することができないが、このポプラの子（注：高田養護学校の校舎西側と寄宿舎前に高く大きなポプラがそびえていて、寄宿舎はポプラ寮と名付けられた。）と親が本当に幸福だと

心から感じ、職員が楽しい職場だと実感認識することであろう。

(1976「おまん先生放浪記」)

4.4.5 研鑽の日々

中村の校長としての実践は、『日本一の養護学校』を目指すそのものだった。

① 全職員による授業研究

「知的障害の子どもたちの特性は」「その子どもたちに対する適切な指導方法は」「効果的な教材は」等々、スタートした高田養護学校の課題はたくさんあった。

教員以外の職員も大勢赴任した。特殊教育を経験したことがない教員もいる。そんな中で、中村は各種研修を充実させ、その成果を積極的に問うた。

教員以外の職員のために、「授業参観週間」を設けた。事務職員や寄宿舎職員が授業を参観して子どもたちの実態と指導方法を学んだ。

② 上越特殊教育研究会の発祥

夏期休業中には、地域の小中学校特殊学級担任者にも参加を呼びかけて、赤倉温泉で宿泊研修会を開催した。講師は校長の中村憲三、教頭の中村秀雄、そして当時新潟市知的障害者施設の園長をしていた中村與吉であった。中村與吉は、戦後新潟県で初めて特殊学級を担当した教員である。

③ 全国ブロックの広域な研究発表会

さらに中村校長は、高田養護学校開校後僅か3年目の昭和45年(1970)に「北信越精神薄弱養護学校研究大会」開催校を引き受け、授業を公開し研究の成果を求めた。

中村校長の信念に基づいた実践に、職員たちも必死でついていったのである。

4.5 養護学校を支えた地域と盟友

4.5.1 校舎・校地の無償提供

前述したように、徳山たちの努力によって集まった500万円の浄財は、当時の高田市の英断により不要となって、子どもたちの教育のために有効に使われた。

現在の高田養護学校校舎は、当時「高田市立金谷中学校」であった。現在の城西中学校に統合となって生徒たちのいなくなる「高田市立金谷中学校」校舎と敷地を、障害のある子どもたちの教育のための施設として無償で寄附するという高田市議会全会一致の英断があったことを忘れてはならない。

無償で寄附された校地と校舎を忘れてはならずと、校舎第1体育館西側に『金谷中学校跡地』の石碑が静かに校舎を見守っている。高田市議会並びに金谷地区住民の意思が刻まれている。

4.5.2 校長の盟友、広瀬光雄

当時高田市議会議員で、自身も身体障害者であり、後に上越地区心身障害者福祉団体連絡協議会長となる広瀬光雄は、学生時代中村憲三と同級生であった。高田養護学校開校後、中村に乞われて高田養護学校の初代後援会長となり、中村と養護学校で学ぶ子どもたちを応援することとなる。

高田養護学校が教育を積み重ねた10年後の創立10周年記念誌に、広瀬の率直な感想が掲載されている。

・・・・・・10年前の養護学校の入学式は、古い体育館に生徒がチョボチョボ並んだ入学式だったが、その賑やかなのには驚かされた。泣く者、騒ぐもの、奇声を発する者、ウロウロ歩き回る者。果ては演壇の校長先生の所へ駆け寄る者。来賓席は一様に哑然とした。

憲ちゃ（注：広瀬氏は同級生の中村校長をこう呼んでいた。）は、特殊教育といったって盲学校しか経験ないし、どうやってこの子ども達を教育するのだろう。えらいことになったと思った。

それが半年たち、1年たって行事で学校に行く度毎に、児童数が増えているにもかかわらず、騒々しさもなくなり、遂に来賓定連のひとり県教委の山田孝治先生が、「立派になった。これが同じ生徒だとは思われない。普通の学校より立派だよ。」とほめられるまでに成長した。

今春の卒業生は、私共を驚かせた。あの10年前の本校の第1回の入学生のわけだが、とても同一人物とは思えなかった。特に入学式で、最も先生方に手を焼かせたS君の堂々たる態度は、教育の効果を如実に見せつけられる思いがした。（中略）誰もが特殊教育の大切さを認識せざるを得ない重要な証拠だと思う。

（1977 高田養護学校創立十周年記念誌 精薄福祉のへそから）

まさに、盟友として、そして乞われて高田養護学校後援会会長として高田養護学校を物心両面から援助してきた中村の友としての感激の一語につきる感想である。

4.6 堅い信念と意気込み

本稿では、高田養護学校創立に熱心に取り組んだ徳山ミサヲ、中村憲三、広瀬光雄の3人に絞って報告した。障害があるために教育受けることができない子どもたちのために、身を捨てて療育機関設置のために尽くした徳山、建立された養護学校の中にしっかりと知的障害教育の魂と指導方法を注ぎ込んだ中村、その学校を地域の一員として、また障害のある人たちの応援者として高田養護学校を見守った広瀬らの堅い信念と意気込みを忘れてはならない。

残念ながら3人とも今は亡き人である。

彼等の他にも、中村のリーダーシップの下で教育に全力を傾けた教職員、子どもたちの送迎に全力を捧げた保護者、養護学校の存在に理解を示し、通学道路拡張などを温かく了承した地域の人たち及び地域の公共機関の方々などなど、高田養護学校教育充実のために礎になった人たちは多く存在することを忘れてはならない。

5 新潟県立柏崎養護学校

5.1 国民病としての結核

結核という病気は、永年、日本の国民病と言われてきた。明治、大正、昭和と結核を患う国民は多く、それによる死亡者数や死亡率も大変高かった。日本病弱教育史研究会（1990）によれば、明治後期から大正を経て第二次世界大戦前後まで、結核による死亡者は10万人から15万人で推移している。そして、常に、死因のベスト3を下っていない。

このため、明治時代から結核療養所が設置され、国としてその対応に当たってきた。しかし、伝染性の強い病気であること、一度罹患し発見されると療養所に隔離されること、病状が進むと生存確率50%といわれていた胸郭整形手術への不安があったことなど、結核患者の生活は不安で過酷なものだった。

第二次世界大戦直後、平和を迎えた日本ではあったが、世の中はまだ疲弊していた。国民病

としての結核の地位も下がらず、昭和 20 年代後半に新薬のストマイ（ストレプトマイシン）等が使用されるようになるまでは、過酷な状態は引き続いた。

5.2 結核の子どもたち

結核は国民病としての色合いが強かったから、当然、療養者にはあらゆる職業の者がいた。教員も療養していたし、もちろん学童も療養していた。しかし、子どもの結核患者のすべてが療養に専念していたわけではない。多くが在宅療養であったと推測される。

新潟県の療養学童について、新潟県立柏崎養護学校編「創立 20 年誌『豊けき朝へ』」（1975）によれば、以下のように当時の現状を知ることができる。

「県教育委員会からの資料によると、昭和 26 年度文部省指定統計の結果は、本県小学生 34 万 2 千名に対して肺結核患者は 525 名、その他の結核患者を加えると 1,780 名にのぼる。実に 200 名に 1 名の罹患率を示している。翌 27 年度の調査は、小中学生の要注意、要休業者は 40 名に 1 名の割で出現していると、驚くべき激増を報告している。柏崎市の要休業学童のうち、15 名は早期の入所加療を要するとされ、刈羽郡では小中学生 2 万名のうち、35 名が長期療養を要するとされた。」

5.3 教育者療友会（教療会）

（以下、柏崎養護学校創立 20 年史、創立三十周年記念誌、創立五十周年記念誌による）

5.3.1 新潟療養所における教育者療友会（教療会）の誕生

昭和 27 年（1952）当時、国立新潟療養所の結核患者は 750 名もいて、正にひしめいていたという。この当時、新潟県下では教員の療養者は 120 名を下らなかったというが、新潟療養所にも 40 名を超す教員が療養していた。

遡る昭和 23 年（1948）、彼らは教員の身分を守ること等を目的として、教員の結核患者の会である教育者療友会（教療会）を組織した。病気がゆえに退職に追い込まれるという悲劇を解消すること等を目的に活動したが、後に療養学童児の教育保障も運動の一端に加えた。

5.3.2 教育ゼロ地帯の驚き

後の教療会の会長になる笹川芳三は、昭和 27（1952）年 1 月 30 日新潟療養所に入院した。昨年まで自覚症状が無く元気でいたのに、突然休養を命じられ精神的に落ち込んでいた。自覚症状がないのに、危険な手術を受けなければならないのかという死への恐怖があった。それゆえ、入所した 3 病棟以外にはあまり出歩かなかった。

3 月の快晴の日、笹川は天候に誘われて売店に出かけたが、そこで大きな衝撃を得た。まず、初代の教療会長佐々木毅が、病衣姿の子どもと遊んでいる光景を見た。そして、「ここにあんな小さな子どもがいるのか」と思った。また、数名の青年が、成人しているにも関わらず「坊、坊」と呼ばれていたのに驚いた。小さいときに入所し、当時「坊」と呼ばれていたのが、成人しても依然として「坊、坊」と呼ばれていたのである。

入所した子どもたちにとって、6 歳になっても就学は夢の世界ということが分かった。笹川は、「教育ゼロ地帯」に愕然としたのである。

5.3.3 生きている死骸

笹川が看護婦（現看護師）の協力で調べると、学齢相当の子ども（学齢を超えた青年は除く）は全 12 病棟の中に点在し、計 10 名いた。そして、死を見つめながら、悲痛な思いを抱いて教

育ゼロ地帯で闘病生活を送っていたのである。

以下、20周年記念誌に見る彼らの心の叫びでの一部である。

- ・「あきらめればいいんですね。あきらめれば らくなるのですね」(女)
- ・「道端の名もない草 だれも友だちになってくれない。ゲタで踏みつけられて 頭を折られ それでもがまんして 自分で自分をなぐさめる」(女)
- ・「あゝ 汽車がいく。ほくを置きざりにした汽車がいく」(男)
- ・「ゴミにまじったオモチャのかけら。わたしは生きている死ガイ」(女)
- ・「そうだろう。ほくの胸の中には 明るい若人の血潮が火のように燃えていたのだ。それなのに 一瞬のうちに社会の人々から区別される人間となってしまったのだ。ほくの心は暗く 希望はだんだん失われていく」(男)
- ・「声高き通学生の過ぎ行けば ひそやかにして秋は身にしむ」(男)

5.4 血を吐く思いの教療会の戦い

(以下も、柏崎養護学校の周年記念誌による)

5.4.1 危険をはらんだ教療会の活動

教療会は、自らの身分を守る運動に加え、療養学童の教育保障についても重要なテーマとした。それは、天職としての教師魂が、「子どもの教育のために」と、病の底からでも心を揺り動かし、後押ししたからであろう。

教療会の運動は、体力を消耗し過酷なものであったので、比較的元気な者が役員に交替して当たった。しかし、運動をするがゆえに病状が悪化し、休養をとらなければならないという事態に追い込まれ、教職員名簿から身分が消えていく者もいた。

極限の中での運動の中心は、自らの置かれている立場や学齢療養児の教育の問題を、県教職員組合に訴え続けることであった。また、対県交渉や国会対策を意欲的に行った。対県交渉には、看護婦(現看護師)を介添えにして臨んだ者もあり、寮に帰ればストマイを打ったり氷を胸に当てたりと悲惨なものだった。

5.4.2 自らの命を断つ同僚

昭和23年(1948)に教療会を立ち上げ初代の会長を務めた佐々木毅は、療養7年目に入り、病状が悪化してきた。仲間の生きる道を説き、運動を組織してきた彼であったが、危険度の高い手術を待ち受ける身となり、過労と心労は極限に達していた。当時、運動の第一の願いであった子ども部屋の発足を目前にしていたが、「佐々木、自らの命を断つ」の悲報が飛んだ。

当時、幹事長を務めていた坂爪順一は、足の痛みから職を辞した。病根が足に現れたのである。一時は両足切断かと危ぶまれたが、骨の移植手術が成功しほっとした。しかし、病状は少しも改善されず、ついにはベッドから降りることも困難になった。こんな中、「坂爪、自らの命を断つ」の悲報が飛んだ。

このように、教療会の活動は、一部会員の命への危機をはらみながらも、少しずつ前進していった。療養学童のための学園(学童療養学園)づくりもそうであった。

5.4.3 学童療養学園の設置への動き

以下、昭和27年から29年に掛けて教療会の動きを中心に、学童療養学園設置への軌跡を20周年記念誌から拾うことにする。

昭和 27 年 (1952)

(1 月, 厚生省は 4 月 1 日から結核医療の公費拡大を決定する)

- ・ 3 月 成人に混じって療養している小中学生の教育問題を, 笹川芳三の発議により教療会が討議を始める。
- ・ 3 月 県教育庁保健係長の樋口均の見舞いあり。療養学童の実態と教育管理の問題について, 善処を要望する。
- ・ 4 月 木村元国立療養所長の意を受けた本宮医務課長と笹川芳三が, 療養学童問題について話し合う (所側との第 1 回対談)。療養と教育, 学童とベッド数等を話題にする。
- ・ 4 月 新潟県教職員組合 (新教組) 刈羽支部と療養学童問題について話し合う。療養学童の教育復権を図るような行政施策を実施するよう, 教組の議題として取り上げてもらうことを要望する。刈羽支部に快諾されるが, 後, 県本部や県大会では「刈羽教組は結核教組」と揶揄されるようになる。

(4 月, 県衛生部が, 5 月に開院する県立三条病院の第二期工事に, 50 床の小児病棟をつくり, 療養学級をつくる計画があると発表する)

- ・ 5 月 文部省の井坂審議官の見舞いあり。結核児の教育保障について陳情する。
- ・ 7 月 木村所長と笹川の対談が行われる (第 2 回対談)。国立, 県立という行政立場の違いの問題もあるが, 乗り越えるための研究や努力をしてくれる旨の約束を得る。
- ・ 7 月 学童療養施設の請願が県議会で採択される。
- ・ 9 月 木村所長より, 10 月 1 日から第 10 病棟を学童病棟にする旨の連絡あり。
- ・ 10 月 第 10 病棟にいる成人患者を, 他病棟への移動を説得するも, 困難を極める。

(11 月, 厚生省は「結核死亡激減」と発表)

昭和 28 年 (1953)

- ・ 2 月 10 日 県立三条病院に療養学童のための学級が三条小学校の分校 (三条養護学園) として開設される。県下初。
- ・ 2 月 木村所長と笹川の対談が行われる (第 3 回対談)。学童病棟の設置を一層前進させたい旨を話し合う。
- ・ 3 月 12 月に入所した石黒通夫の斡旋で, トンチ教室の石黒敬七病棟を慰問する。
- ・ 3 月 岡田県知事が柏崎農業高校の卒業式に来柏したおり, 石黒県議の斡旋で, 丸山員弥, 内山平治, 高橋徳光が代表して療養学級の設置を陳情する。

(3 月, 厚生省が結核実態調査を発表。予想を超える深刻さが示された)

- ・ 8 月 トンチ教室の石黒敬七, 再び子ども病棟を慰問する。
- ・ 8 月 病棟で毎週水曜日の夜 7 時から 1 時間半, 田巻健三を講師に英語の指導を始める。
- ・ 10 月 県教組の第 1 回結核対策委員会が行われ, 笹川がそこに出席し, 療養教員の問題とともに, 療養学童のための療養学級を早期に設置することを訴える (しかし, 学童問題はなかなか前進せず, いつまでも実態調査の段階である。笹川はもどかしさを感じた)。
- ・ 11 月 英語学習は冬休みに入る。
- ・ 11 月 療養学童の代表が, 新療会 (新潟療養所に入所する患者の会) に抗議文を突き付ける。教療会が代わって受け取る。その趣旨は下記の通りである。

我々は子ども部屋に集められているだけだ

- ・教療会の好意はありがたいが、それは私的なもの。甘えているのはもうたくさんだ。
- ・友は、中学から高校へとどんどん進んでいく。俺たちも勉強したいのだ。病棟では、暗い光の下で参考書に当たるなど、一生懸命勉強している。でも、それが何になるのだ。
- ・新療会は患者運動だけに夢中で、俺たちはほっておかれている。どうしてくれるのだ。

持参のメモにはこんなことが

- ・ことしも冬がやってきた。寒さは厳しくなってくるし、雪も降ろう。われわれは空しくテキストを閉じて、ペンを投げ捨てて、その手を頭ごとふとんの中にもぐりこまねばならんのだ。
- ・冬がわれわれのはかない夢をペチャンコにした。一週一度の英語をうばってしまった。暖房設備もなく、大黒板もなく、一本のチョークすら治療室から借りる有様が夢をうばったのだ。
- ・われわれは勉強する権利があるんだ。
- ・勉強したい、病気の許すかぎり勉強したい。
- ・われわれは一体、だれに頼ればいいんだ。だれにすがればいいんだ。

- ・12月 高沢10病棟長、丸山員弥教療会長、笹川、高橋の四者会談（第4回対談）が行われ、学園開設の具体策、国立機関に県立機関を置くことの可能性の促進、文部行政と厚生行政の調整等、公共性の学園にすること等について話し合う。

昭和29年（1954）

- ・1月 木村所長との対談（第5回）。学園開設について、木村所長に、全国のテストケースとして勇断をもっての実施をお願いする。
- ・2月 木村所長との電話対談（第6回）。近藤柏崎市教育長との要談の結果について話があった。結核教員の試験勤務場所として、療養所にベッドを持ちながら勤務させることは可能とのこと。（療養所に学園さえあれば、教療会にはその任に当たる者はいる。その時が近いと会員は思った）
- ・2月19日 木村所長との対談（第7回）。まず、電話で、4月1日から学園を開くとの連絡あり。笹川、丸山、石黒らの教療会員は、あまりの嬉しさに気が遠くなりそうだったという。午後、開設準備の打合せを行う。試験勤務者として、主任に丸山員弥、専任に石黒通夫を内定する。（会員にとって、この日は祈念すべき日になった）
- ・3月 第10病棟の熱田主治医らと丸山、石黒が学園運営について話し合い、下記のような基本的事項を決定する。
 - ① 全員を参加させて、病状を観察する。
 - ② ホームルームを充実させて、生活指導と情緒安定の指導に万全を期す。
 - ③ 生徒が喜んで授業に参加するよう、指導に留意する。
 - ④ 学習指導は義務教育未修了者を主体とする。
 - ⑤ 療育体制を崩さない学習活動であること。
- ・3月 丸山、石黒が、近藤柏崎市教育長、今井市衛生体育課長を歴訪し、学園開設の挨拶と今後の協力援助を要請する。
（3月、厚生省が初の結核実態調査結果として、患者数292万人、要入院137万人であると発表する）

5.5 新療学園から県立養護学校へ

こうして、昭和 29 年（1954）4 月 3 日、ついに療養学童児のための学園（柏崎養護学校の前身）が誕生したのである。場所は 10 病棟の臥堂（社会復帰のために試験的に生活する部屋）であった。学園は内山平治の発案で「新療学園」と命名された。私塾のような新療学園ではあったが、この誕生には、教療会員はもちろん、療養所関係者、行政関係者の強い後押しがあったのである。

開設当時、生徒数は男 8 名、女 8 名（内小学生 1 名）の計 16 名、スタッフは丸山、石黒を専任とし、これを補助する者 8 名であった。ちなみに新療学園の誕生を支えた教療会員は 45 名であった。

開設はされたものの、新療学園の実情は私塾であった。それゆえ、不足する物品、国立と県立の埋められない谷間、厚生と文部の行政官の壁等々、不安と課題は山積していた。しかし、その後も、教療会の代表である笹川や丸山らの努力で、一つ一つ乗り越えていくのである。

昭和 33 年（1958）4 月、柏崎市立大洲小学校、第三中学校の分校として認められ、5 年後には県立に移管された。すでに、昭和 32 年（1957）10 月、県立三条病院に併設されていた県立三条養護学校の柏崎分校としてであった。

5.6 病弱児の教育ゼロ地帯の解消者たち

柏崎養護学校の前身である新療学園は、換言すれば、結核の教師たちが療養学童の「教育ゼロ地帯」を解消するために、正に血を吐く思いで立ち上げた学園である。教師としての使命観が、結核療養児の教育保障を真剣に後押しし、命を省みずに取り組んで誕生させた学園である。

残念ながら、病弱児の県立養護学校の誕生は三条養護学校に先行されたが、その本家本元は柏崎養護にあるといってよい。病弱教育に携わる教師を始め障害児の教育に携わる者は、新療学園の開学に尽くした教師魂を決して忘れてはならない。

6 おわりに

新潟県における特別支援学校 4 校について、開学のきっかけとなった出来事、開学に尽力した人々の活動、また、障害児の教育を立ち上げ推進した人々の強い情熱等について明らかにしてきた。これらは、以下のようにまとめることができる。

- ・開学のきっかけは、自らが障害を負う危機に直面した人とか、子どもや孫など、家族や身近な者の障害に対し、その教育や自立のために何とか教育機関をとという強い願いや情熱によるところが大きい。
- ・開学に漕ぎ着けるためには、障害児の教育についての先進的な思想、多くの浄財、実践的指導力を有する人材等が必要であった。4 校は、中央や地方の知識人、多くの篤志家、身近な支援者、意欲的に学ぼうとする障害者などの努力で、苦勞しながら開学を成し遂げ、継承してきた。
- ・後世に引き継ぎたい開学に尽くした人々の精神として、東京盲啞学校長小西信八の「たふれてもまたおきあがる」や、高田盲学校長大森隆碩の「心事未ダ必ズシモ盲セズ」、長岡聾学校の開学に尽くした金子徳十郎の「自分の子一人だけでなく他の子にも教育を」、高田養護学校の開学に尽くした徳山ミサヲの「捨身の願い」、柏崎養護学校開学に尽くした

笹川芳三の「教育ゼロ地帯の解消」などが特筆される。

今日、特別支援教育への転換が図られたとしても、それぞれの特別支援学校開学の精神は、語り継がれ継承されていかなければならないものであろう。

【参考文献】

- 山田正作 1973 米山検校鍼道学校設立願文についての考察 新潟県社会科教育研究会紀要第8集
- 米山検校 1754 鍼道指南之学校設立願文全文 新潟県立高田盲学校所蔵
- 新潟県立高田盲学校 1981 高田盲学校人物誌（資料編その一 大森隆碩）
- 田部英一 2003 地方に初めてできた雪国・高田の盲学校 （有）ボロンテ
- 新潟県立高田盲学校創立九十周年記念誌編集委員会 1977 創立九十周年記念誌 新潟県立高田盲学校
- 長岡聾学校百年史編集委員会 2005 長岡聾学校百年史 新潟県立長岡聾学校
- 関本賢太郎 1956 創立五十周年記念誌 新潟県立長岡聾学校
- 七十周年記念実行委員会 1975 創立七十周年記念誌 新潟県立長岡聾学校
- 新潟県立高田養護学校記念誌編集委員会 1972 創立五周年校舎竣工記念誌 新潟県立高田養護学校
- 新潟県立高田養護学校 1974 教育課程編成のあゆみ
- 新潟県立高田養護学校記念誌編集委員会 1977 創立十周年記念誌 新潟県立高田養護学校
- 中村憲三 1976 おまん先生放浪記 週刊文化新聞社
- 全国病弱虚弱教育研究連盟 1990 日本病弱教育史 日本病弱教育史研究会
- 石黒通夫 1975 創立20年誌 豊けき朝へ 新潟県立柏崎養護学校
- 大滝哲雄 1984 豊けき朝 創立三十周年記念誌 新潟県立柏崎養護学校
- 創立五十周年記念事業実行委員会 2004 創立五十周年記念誌 豊けき朝 新潟県立柏崎養護学校

The minds and histories of people who have made efforts to establish special support schools in Niigata prefecture

Akio MARUYAMA * and Toshikatsu KOSUGI ** and Akira KONISHI ***

ABSTRACT

Special support schools have been made as schools for the blind, the deaf and physically handicapped or mentally retarded children. These schools are based on the pioneers' firm and enthusiastic belief that education for handicapped children is indispensable.

In this paper, we clarify the circumstances and problems that arose when four schools in Niigata prefecture were established. In addition we clarify each school's educational basis and the mind that supported it since the schools have been established.

We conclude that the process of setting up the special support schools in Niigata prefecture was taking advantage of the ideas and movements of people involved handicapped children. In particular, there was much effort from their families, teachers, doctors and neighborhood. We think that these ideas and efforts should be inherited and passed down from generation to generation..

* Demonstration and Research Center for Children with Disabilities

** School for children with intellectual disabilities, Takada

*** School for the Blind, Niigata